

フォイエルバッハの会通信 第105号

換我心為你心（私の心をあなたの心と取り替えれば）

石塚正英

例年私は、中央大学文学部で講座「西洋思想」を担当していますが、本年度後期は「身体知と感性知」というタイトルで講義しています。10月頃、フォイエルバッハ思想を下敷きにして「自然的・感性的身体」を講じました。

・私にとって私の身体は、一方では私の感覚知覚の対象（他者）であり、他方ではあなたの感覚知覚の対象である。

・〈私とあなた〉が対になると、あなたはもう一人の私となり、私はもう一人のあなたとなる。つまり、互いが互いの〈他我(alter ego)=もう一人の私〉となる。

・その相互的転化を実現しているのは生身の身体、私の身体、あなたの身体である。

本会のメンバー各位には説明無用なのですが、フォイエルバッハは、「我と汝」双方にとっての身体を考えます。我にとって私の身体は私の感覚・知覚の主体であり、私の欲求や願望の発信源です。しかし汝にとって私の身体は汝の感覚・知覚の対象であり、汝の欲求や願望の向かう先であります。ところで、そこで私の身体と他者の身体は対立するものではありません。我と向かい合ったもう一人の我、つまり他我（アルター・エゴ）の意味をもつのです。我と汝という二つの個別が「我と他我という対を単位とする普遍」に転化しているのです。その転化を実現しているのが生身の身体、私の身体、汝の身体ということなのです。そのような意味で、フォイエルバッハの捉える人間は、身体的存在なのです。

そのような講義を行っている中、中には眠くなる聴講生がいます。そこで、飽きないよう、ときに私は恋人どうしの愛の告白を交えて解説するのです。

「私の心をあなたの心と取り替えれば、ようやく知ることでしょう。二人はこんなにも深く相思相愛であることを」

この文章は蜀の詞人・顧夔（こけい）の『訴衷情』という詞の最後の一節を解釈したものです。原文は以下の通りです。「換我心 為你心 始知相憶深」男性である作者が女性の立場、気持ちになってつくった作品ということらしいです。このような詩歌は古今東西、いずこにも知られるとはいえ、昨今の若者たちは「愛」とか「恋」とかを単に個人の感情と知っているくらいがあります。とんでもないことです。一人だけでは他者を思う気持ちは生まれません。「あの人を愛することにするかどうか、考え中」なんて態度は「愛」とも「恋」とも無縁の、打算です。五輪真弓が歌う「恋人よ」に心引き付けられる私は、それ以上はるかに強く、フォイエルバッハの「他我」に引き付けられてきました。

ところで、このエッセイを書こうと思った動機は、韓国の歴史ドラマを見た事です。先日、韓国歴史ドラマ「王女の男」をみていたら、主人公のキム・スンユと恋人のイ・セリョンが気になる言葉を交わし合っていました。ともに中国の漢詩を読んだものです。まず、スンユが先ほど紹介した漢詩を詠みます。続いて恋人のセリョンは以下の漢詩を詠みます。「問世間 情是何物 直教生死相許」（金の元好問が1205年に書いた『雁丘詞』から。解釈：情とは何かと世間に問うたとして、思うに、私たちにとって何もためらうことなく生と死を共にすること、これこそが情です、と答えましょう）

この返答に接して、私はまたもやフォイエルバッハを思い浮かべました。「【死がなければいかなる神も存在しない。】これはすでにまた単純な根拠から出てくることでもある。なぜなら、タナトス [Thanatos ——ギリシア神話における死の神] が存在しなければいかなるアタナトス [Athanatos ——ギリシア神話における不死の神] もなく、死がなければいかなる不死もないからである。しかるに、死にたくないという願望から発生した不死は神の根本規定である。

(Ludwig Feuerbach, Gesammelte Werke, hg. v. W. Schuffenhauer, Bd.7. S.342. 船山訳 13巻. p.335.)

韓国の歴史ドラマで二人が相互に交わしたこの情感、どことなく、フォイエルバッハ「我と汝」を思い出させるのです。（念のため書き添えますが、このエッセイ、若き日々のわが身の追憶でもありませんし、はしだのりひこへの挽歌でもありませんが、心に涙してドラマを見ていたことが原因であることは確かです。）

補足：私はこの秋から JST（国立研究開発法人科学技術振興機構）の中国向けメディア「客観日本」（中国語）に、シリーズ「地域文化の沃土、頸城野から（地域文化的沃土-頸城野）」を JST による中国語訳で連載しております。つきましては、最新の第 2 回を以下のサイトでご覧ください。

http://www.keguanjp.com/kgjp_baike/kgjp_bk_lishi/pt20171129093551.html

第 2 回タイトルは「1994 年初夏の越柳雨乞い儀礼（1994 年初夏越柳的祈雨儀式）」です。1994 年、この年、天候不順のため農作物は不作でした。戦後初めて米の輸入が行われました。6 月、中頸城郡三和村（上越市三和区）の現地ため池に立ち、雨乞い儀礼のルポルタージュを書いたのですが、今回はそのダイジェストです。現代日本、ハイテク日本、その農村には、神仏を虐待する民がいる。なんとしたことか！ 執筆者としては、こういった逆カルチャーショックが得られれば幸いです。フォイエルバッハ思想（自然信仰論）が下敷きになっているエッセーです。

ウルズラ・ライテマイヤー「誤認された思想家から現代的思想家へ。ドイツ語圏における 1965 年から 2015 年までのルートヴィヒ・フォイエルバッハ哲学の受容」(2)

1. ヴェルナー・シュッフェンハウアー『フォイエルバッハと若きマルクス』(10)

本書は、より良い社会や福祉の概念をめぐるイデオロギー的塹壕戦によって導かれた冷戦時代に出版された。原則として資本主義と社会主義、民主主義と全体主義は対立するが、時として両者が一団となって全体をなす。共産主義者は全体主義者に対して利益を追求するだけの資本主義的経済形式を批判し、資本主義者は計画経済とそれを指示する共産党の全体主義を批判し、共産党は政治風土を一党体制に変えたという。壁のこちらとあちらの政治的決定者すべてが明らかにイデオロギーの前線に立つことを望む限り、正統イデオロギーの立場からの逸脱は両者にとって疑わしく思われたが、共産主義の東ではそれは評価され場合によって公認された。しかし、若きマルクスの主題は、マルクス・レーニン主義の読み方からすれば、1848 年にエンゲルスと共同で書かれた『共産党宣言』以前はブルジョア陣営とあまりに密着しているがゆえに、ドイツ民主共和国(DDR)ではある程度挑発と見なされねばならず、他方西ドイツでフランクフルト学派への大きな影響で関心と呼び、カール・マルクスの初期著作への特別の関心が生じた(11)。それ以上にこの研究が示していることは、しかも 1844 年のマルクスとフォイエルバッハとの往復書簡の写真が本書に掲載されたことで、マルクスは、エンゲルスが 1888 年に回顧して(12)語ったような「一時的」フォイエルバッハ主義者であるというよりも、『ドイツ・イデオロギー』も含めて 1846 年まで狭義のフォイエルバッハ主義者として通用するに違いないということであり、そうであるとすれば(13)、理論的に問題となるのはマルクス主義のブルジョア的根源であり、それはエンゲルスやマルクス・レーニン主義正統派からすれば絶対に持つはずのないものだろう。マルクス主義はマルクスの初期著作から離れ、したがってマルクスを全体として低く評価しなければならないのか、それとも、初期著作が——シュッフェンハウアーはこれをあてにしたように見える——すでに行われていたブルジョア哲学との決別という意味で高く評価されるのかのどちらかである。すなわち、マルクスの初期作品のこの新評価は、『全集』(14)の将来の編集者がそう解釈するように、フォイエルバッハの新評価への道をならし、それによってフォイエルバッハ全集の批判的編集の可能性を開くであろう。

一部はまだ文書館に保管されている膨大なテキスト群を目前にしてライフワークとしてのみ計画しうるこの企てとして、フォイエルバッハとマルクスとの理論的結びつきに関するシュッフェンハウアーの仕事は読まれなければならない。フォイエルバッハ著作の批判的全集版のプログラムのための同盟を見つけることが重要で、それは検閲の時代には、固有のテキスト、固有のメッセージを隠して、自ら検閲の時代に執筆したフォイエルバッハが表現したように、「武装した目」(15)でしか見えないようにすることを意味する。すなわち、検閲のために数行折り込まれたが、フォイエルバッハは「社会的プロセスを唯物論的に捉えることができない」と強調し、それゆえ、「労働者の大衆的世界観」を学問的革命的に構築することに成功しうるのはマルクスを待って初めてであるとされる。西ドイツの社会学者ハインリヒ・ポーピッツも、「マルクスへのフォイエルバッハの現実的影響」(16)を追い求めない敵対者として検閲で動員された。しかし、「武装した目」に対するメッセージはほかにある。それは、マルクス・レーニン

主義的プログラムという枠組みのなかでのフォイエルバッハ新評価への要求を含むが、そのプログラムの教条主義は、学問的議論や、したがってまたあらゆる社会的領域への効果を失った。このフォイエルバッハ新評価と結びついて期待されることは、マルクス主義的理論形成の内部でのパラダイムチェンジが、官僚化され監視されることの少ない生活という意味での社会的実践に作用し、フォイエルバッハ哲学が、図書館に広く存在するかぎり、こわばった社会主義を人間的にし、できるだけ民主的にする潜在力を持っているだろうということだった。

このことに加えて、フォイエルバッハと若きマルクスに関するシュッフェンハウアーの仕事は、カール・マルクスのほとんど知られていない初期著作への関心についての仕事を通して、西ドイツでもフォイエルバッハに対する新たな関心を引き起こした。ここでとくに名前を挙げるとしたら、ホルクハイマーの弟子のアルフレート・シュミットで、彼は 1967 年に 2 巻本のフォイエルバッハ著作集を編集し(17)、また、彼の 1973 年のフォイエルバッハ研究書『解放をめざす感性』(18)は、シュミットがフォイエルバッハを人間学的唯物論の創始者と解釈し、したがってまたフォイエルバッハをマルクスの同志として西ドイツ左派の観点から高く評価するかぎり、シュッフェンハウアーの結論と結びつく。だが、エーリヒ・ティースも、ゾーアカンパ社の 5 巻本フォイエルバッハ著作集(19)と、——カルロ・アスケリと共同して——『全集』で今日まだ完全には収録されていないエアランゲン講義の公刊(1974 年)(20)で私たちは世話になっているが、マルクスの初期著作へのフォイエルバッハの影響に関する、シュッフェンハウアーによって喚起された議論によって、自分なりにフォイエルバッハを、さらに若きフォイエルバッハを、よりいっそう厳密に注視する気にさせられたに違いない。ティースは若きフォイエルバッハを、シュッフェンハウアーとは異なり進歩的ヘーゲル主義者として特徴づけ、またエンゲルスと異なり、政治的に意識した三月前期の立役者として特徴づける(21)。

註

- 10 Werner Schuffenhauer, *Feuerbach und der junge Marx. Zur Entstehungsgeschichte der marxistischen Weltanschauung* (1965), Berlin 1972 (zweite Auflage). 引用文中括弧内の頁数はこの版のものである。以下各章でのフォイエルバッハ研究からの引用も同じ。
- 11 フランクフルト学派が東独で「公式に」修正主義、すなわちマルクス・レーニン主義のテキストの誤った解釈だと非難された主たる理由はここにあるだろう。私は『マルクス・エンゲルス全集 MEW』補巻——1968 年によりやくパリ草稿を公開した——から以下の一文を引用する。「マルクス・レーニン主義のいっそう増大する影響と戦うためにブルジョアイデオログたちは、マルクス主義の発生史を客観的に与えられる歴史的発展条件から引き離そうとする。その際彼らはとくに若きマルクスのいくつかの見解を、マルクスとエンゲルスの著作全体の思想連関から引き離したり、この連関を時代錯誤的に構成したりする。彼らは、革命的学問の両巨匠の連続的な精神的政治的発展を否定し、若きマルクスを後年のマルクスと、若きエンゲルスを後年のエンゲルスと対立させる。彼らは、エンゲルスの指導の価値を下げ、あるいは、マルクスとエンゲルスを互いに対立させようとする。こうして、あるいは他の方法で、彼らはマルクスとエンゲルスの初期著作の客観的意味や思想的新しさを偽造し、彼らの成長発展過程全体を偽造する。彼らは、労働者階級のように生じつつある革命的世界観の質的新しさの萌芽を否定したりぼやかしたりし、まだ不確定なものを絶対化し、そこから「真のマルクス主義」を構成し、それをマルクス・レーニン主義に対置する。」(MEW 40, VIII.)同じ序文の中でマルクスへのフォイエルバッハの影響が特に評価された(IX)ことはもちろん注目に値する。この意義変換は、3 年前に公刊されたシュッフェンハウアーの研究に帰することができるだろう。
- 12 フリードリヒ・エンゲルス「ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の出発」(MEW 21, 259-307, 272)参照。
- 13 ここで参照されるのは、しばしば引用されるエンゲルスからマルクスに宛てた 1846 年 10 月 18 日付書簡であり、そこでエンゲルスは、フォイエルバッハの新刊書『宗教の本質』を「くだらない」と評している(これについては、Francesco Tomasoni, *Ludwig Feuerbach und die nicht-menschliche Natur. Das Wesen der Religion: Die Entstehungsgeschichte des Werks, rekonstruiert auf der Grundlage unveröffentlichter Manuskripte*, Stuttgart-Bad Cannstatt 1990, 22)も参照せよ)。さらにエンゲルスは付け加え、マルクスを政治的兵役拒否者フォイエルバッハの牙から解放するために説得的宣伝活動をしなければならないと述べている。この点に関しては、Ursula Reitemeyer, *Bildung und Arbeit von der Aufklärung bis zur nachmetaphysischen Moderne*, Würzburg 2001, 97-98 も参照

せよ。

- 14 シュッフェンハウアーが編集した批判的フョイエルバッハ全集第1巻は *Pierre Bayle* だが、シュッフェンハウアーはこれを『キリスト教の本質』（1967年に印刷に付された Ludwig Feuerbach, *Gesammelte Werke* (GW), hg. von Werner Schuffenhauer. Berlin 1967ff., Bd. 4) の習作と見なしている。すなわち、このまだ知られていないフョイエルバッハの研究が、一般に主著と見なされている『キリスト教の本質』よりも前に公刊されたことでフョイエルバッハ研究を喚起し、さらにそれがマルクス・レーニン主義の準則よりはるか先を行くものであることを立証した。
- 15 Ludwig Feuerbach, *Zur Kritik der „positiven Philosophie“* (1837), in: GW 8, 206. さらに、Michael Jeske, „Politische Implikationen der emanzipatorischen Sinnlichkeit“, in: Katharina Schneider (Hg.), *Der politische Feuerbach*, Münster 2013, 19-38, 35 を参照せよ。
- 16 ここでシュッフェンハウアーが引き合いに出しているのは、1967年に公刊された研究書 Heinrich Popitz *Der entfremdete Mensch* である。
- 17 Ludwig Feuerbach, *Anthropologischer Materialismus. Ausgewählte Schriften*, hg. v. Alfred Schmidt, Frankfurt / Wien 1967, Bd. I u. II.
- 18 Alfred Schmidt, *Emanzipatorische Sinnlichkeit. Ludwig Feuerbachs anthropologischer Materialismus*, München 1973.
- 19 Ludwig Feuerbach, *Werke in sechs Bänden*, hg. v. Erich Thies, Frankfurt 1975 を参照せよ。ここで注目すべきことは、この版は6巻本として計画されたが第6巻は公刊されなかったことである。
- 20 Ludwig Feuerbach, *Vorlesungen über die Geschichte der neueren Philosophie*, hg. v. Carlo Ascheri u. Erich Thies, Darmstadt 1974 ならびに *Einleitung in die Logik und Metaphysik*, hg. v. Carlo Ascheri u. Erich Thies. Darmstadt 1975 を参照せよ。
- 21 包括的で今日まで依然として重要なフョイエルバッハ研究である Simon Rawidowicz *Ludwig Feuerbachs Philosophie. Ursprung und Schicksal* von 1931 ならびに Löwith の論文 *Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosophie* von 1928 ——このタイトルはエンゲルスによるシュタルケ批評を再録したもの——は、シュッフェンハウアーによって密かに認知されたフョイエルバッハの理論的自立性を非難するエンゲルスの解釈路線のうえに学問的な根本において立っている。三月前期とその周辺に関するラヴィドヴィッツとレーヴィットの偉大な哲学史的研究に媒介されて（この点に関するレーヴィットの著作として1939年の *Von Hegel zu Nietzsche* が挙げられる）、フョイエルバッハに対して自然科学の教養のない「俗物化した」恋に落ちた脱落者だとするエンゲルスの否定的評価は現在まで生き延びている。

(柴田隆行訳)

訃報

本会会員の半田秀男氏（大阪市立大学名誉教授、元大阪千代田短期大学学長）は、本年10月27日に79歳で永眠されました。ここに哀悼の意を表します。

フョイエルバッハの会

事務局から

* 本紙は季刊発行です（次号3月）。ぜひ情報やお便り等をお寄せ下さい。

* 年会費 500 円。郵便振替 00160-1-84468 「フョイエルバッハの会」。

〈事務局連絡先〉

112-8606 文京区白山5丁目28-20
東洋大学社会学部柴田研究室気付
フョイエルバッハの会
tamast@toyo.jp
<http://www2.toyo.ac.jp/~stein/fb.html>